風詩

9.29.2014

瀧井克也

電車の中に倒れてた、
踏みつぶされた吸殻が。
これは事件だ　犯人は
踏まれ続けた人々か。
踏むのになれた人々か。

電車の外に飛び出せば
ぽつぽつ雨が降っていた。
踏みつけていく雨粒に
ちらりと空を見上げれば
雲がにやりと笑ってた。

とぼとぼ歩く目の前に
投げ捨てられた吸殻が。
思わず足を踏み出せば
小さく安堵、足ごたえ。
こぶしの中に風１つ。

*この詩は高校３年の時に作成した後、なぜか心に刻み込まれていたものを、記憶を頼りに思い返し再筆したものである。